

古代反切の口唱法

中村雅之

1. 反切の形式

中国で後漢の末頃に考案され、近代まで用いられた注音法として反切がある。「BC」という2文字で「A」の発音を表示するものであるが、その形式には以下の3種がある。

- (1) A BC
- (2) A BC反
- (3) A BC切

このうち(1)は『説文解字』の唐写本や敦煌出土の『毛詩音』残巻などに見られるもので、小西甚一(1948)はこれを反切の最初期の形式と見なしている。(2)はおおむね唐末以前、(3)は宋代以降の形式で、五代の時期には両形式がある。以上を「反切」と総称するが、「反」および「切」という用語の意味するところについては本稿の最後に述べたい。

上の形式のうち、「A」を帰字(または被切字)、「B」を反切上字(または単に上字)、「C」を反切下字(または単に下字)と呼ぶのが慣例である。反切とは、帰字Aと声母を同じくする上字Bと、帰字Aと韻母を同じくする下字Cによって形成される。つまりBの声母とCの韻母を合わせれば、求めるAの発音になる。

2. 反切の口唱法

反切の目的が注音にある以上、反切は何らかの方法によって口で唱えられたものと考えられる。口唱を通じて正確な発音を求めるわけである。そこで、どのような方法によって口唱されたかが問題となる。現在のところ、反切の口唱法に関する論として以下のものがある。

- (a) 縮合式口唱法(平山久雄 1966)
- (b) 分析的口唱法(遠藤光暁 1988)
- (c) 声母代入式口唱法[=双声法](中村雅之 1992)

まず(a)縮合式口唱法であるが、この名称は平山氏自身によるものではなく、ここでの仮称である。その方法は「まず、上字と下字の音を緊密につづけて発音し、それを繰り返しながら、上字韻母、下字声母にあたる部分の調音をゆるめ、それと共にそれらの間に存する音節環境のはっきりした分節を次第にぼかしてゆく。やがてこれらゆるめられた調音をとり去って、上字声母と下字韻母を直接に結び合せ、一音節に発音する。」と記されている。つまり、最初は2音節からなる反切をそのまま読み上げ、何度か繰り返すうちに不要部分を切り捨てて、一音節に縮めてゆく方法である。この方法はおそらく多くの人に最も抵抗なく受け入れられるものであろう。近世以降に実際にこの方法が行われたことは、次の2点から確認できる。

その1、縮合式口唱法を前提として反切を作るとき、韻尾をもたない(=開音節の)上字とゼロ声母の下字を組み合わせるのが最も合理的であるが、明清代には意図的にそのような反切を作成しようとした韻書がある。

その2、沈括『夢溪筆談』を初めとして、宋代以降には反切の起源を古来の二合音(「之乎」が縮まって「諸」となる類)に求めるものが多い。これは反切を縮合式口唱法によって理解していたと考えるのが最も自然である。

このように、(a)縮合式口唱法は宋代以降には実際に用いられた方法と認められる。しかしながら、唐代以前の反切(本稿ではこれを「古代反切」と称する)は縮合式口唱法には適した構造になっていない。これについてはすでに清朝の陳澧が『切韻考』の中で「切語之法、非連読二字而成一音也。連読二字、成一音、誠為直捷。然上字必用支魚歌麻諸韻字、下字必用喉音字。……否則中有窒礙、不能相連矣。」と指摘している通りである。

次に(b)分析的口唱法であるが、これもここでの仮称である。遠藤氏はまず反切の起源について、上古以来の合音現象が内因となり、仏教の伝来とともに梵字に触れたことが外因となって反切が生まれたとするのが妥当とした上で、「もし反切の案出に梵字が果たして関与して

いたならば、原初の認識においては、反切上字と下字は対等な関係にあるのではなく、上字が母体であり下字はその容飾と見做されたであろう。この場合、帰字の音声を求める過程はまず上字を土台として声母を浮かび上がらせ、それに下字の韻母を配合するという底のものであったであろう。」という。根拠となる資料は等韻学関連のものであり、そのような学問の素養をもった僧侶たちが分析的口唱法を用いた可能性は低くない。この方法はある意味では現代の学習者が IPA を用いて「東(tuŋ)：徳(t-)紅(-uŋ)反」と分析するのに似た部分があり、音声観察に慣れたものにとっては最も簡易にして精密な方法といえる。しかし等韻学が盛んになるのは早くても唐代中期以降と思われ、それ以前の時期に分析的な方法がどの程度一般的でありえたかについては疑問である。また、私自身は反切の創出に梵字の影響ありとする立場を取らない。梵字の影響を受ける可能性があるのは、当然それを知る僧侶たちに限られるであろうが、現在知られている限り、初期の反切は服虔、応邵、孫炎などによるものであって、僧侶によるものではない。

最後の(c)声母代入式口唱法は、反切を「双声語」に作りかえる方法である。「東：徳紅反」の場合、反切「徳紅」を「tək-fuŋ」と何度か繰り返して読み上げてから、上字「tək」を基準として双声語(声母を同じくする二字語)に作りかえる。つまり「tək-fuŋ」→「tək-tuŋ」とする。ここで新たに生まれた「tuŋ」という音節が求めるべき帰字「東」の発音となる。旧稿においては紙幅の関係もあり、また主たるテーマではなかったこともあって、このような口唱法を想定する根拠を述べることができなかった。本稿をなす所以である。

3. 南北朝反語(双反)

唐代以前には「反語」という語に二つの意味があった。一つは我々のいう「反切」であり、もう一つは顧炎武のいう「双反」である。顧氏は『音論』「南北朝反語」において「南北朝人作反語、多是双反」と述べ、多くの例を挙げている。例えば、「清暑」に対する「楚声」、あるいは「同泰」に対する「大通」などである。これらは「BC」に対して、その声母と韻母の組み合わせを取り替えた「AD」という二字をあてるもので、建物の命名の際などにその吉凶を判断する材料とされたが、音学的には反切の構造に通じる点がある。

もう少し詳しく見てみると、「清暑：楚声」においては「清」の声母と「暑」の韻母を組み合わせたものが「楚」であり、「清」の韻母と「暑」の声母を組み合わせたものが「声」である。「同泰：大通」においても同様で、「同」の声母と「泰」の韻母を組み合わせると「大」ができ、「同」の韻母と「泰」の声母を組み合わせると「通」ができる。このような二字の連なりの一方を「BC」とし他方を「AD」で表すと、実は「A」と「BC」の関係はまさに帰字と反切の関係に等しい。反切「清暑」から求められる帰字の音は「楚」のそれであり、「同泰」を反切と見れば「大」の音が求められる。すなわち、その用途から見る時には、一方は占い、他方は音注であるが、その音声の構造においては、「反語(双反)」と「反切」とは密接な関係を有するものと考えられる。

反切が古くは一般に「BC反」という形式を有しているのも、まさしくこの「反語」と密接に関係するものと意識されたゆえであろうことは、すでに小西(1948)の指摘するところである。そうであるならば、反切の口唱法を探ることは反語の口唱法を探ることにほかならない。

「BC」からいかなる口唱を経て「AD」を生み出すのか、そのメカニズムが判然とすれば、反切の口唱法も自ずと明らかになるであろう。

4. 『広韻』所載「双声疊韻法」

現行の『広韻』には巻末に「双声疊韻法」と題された表がある。「双声」とは前述のごとく声母を同じくする二字の連なりであり、「疊韻」とは韻母を同じくする二字の連なり(またはその関係)をいう。「duŋ-dai」や「t'ai-t'uŋ」が双声であり、「duŋ-t'uŋ」や「t'ai-dai」が疊韻である。『広韻』に付された表は一見すると反切に関する何らかの説明であるかのように見え、実際に「章 灼良切／章略切」のように反切の形式が掲げられているが、これは恐らく後の手になるもので、元来は「灼良／章略」という双反の形式とその解説であったと思われる。

この表に類するものとして宋本『玉篇』巻末の「五音之図」があり（外見上のつくりはかなり異なるが、「居隆／宮聞」など双反を基本とする図表である点が「双声疊韻法」に類する）、さらに古くは『文鏡秘府論』に引く「調四声譜」に「綺琴／欽伎」などを基に説明を加えたものがある。（cf.小西 1948）

『広韻』所載の「双声疊韻法」が他の資料と異なる点は、その二段目に「先双声／後疊韻」と記されていることである。私見では、これこそが反語作成の奥義と称すべき部分である。「灼良」に対してその反語たる「章略」を作り出すときに「先双声」つまり「双声を先にし」て「章」を導き、次に「後疊韻」つまり「疊韻を後にす」ることで「略」を生み出すのである。こうして反語「章略」を作ることができる。この順序が決まっていることによって、「略章」のような誤った反語を作ることが避けられる。前述の「清暑：楚声」や「同泰：大通」においても、もとの二字の第一字が必ずその反語の第一字と双声の関係にある。まさに「先双声」という状態にあるのである。

これを口唱の観点から見ると、どうなるであろうか。「灼良」からまず最初に“双声”を基準として「章」を導くのであるから、「tciak-liap」→「**tciak-tciap**」と双声語を作る作業を行うことによって新たに「tciap」という音節を作り出すのではなかろうか。そして次に“疊韻”を基準にして「略」を導くには、「tciak-liap」→「**tciak-liak**」と疊韻語を作る作業によって「liak」という音節を得るのではあるまいか。「双声疊韻法」の「先双声／後疊韻」を私はそのように解釈する。

以上のような反語作成の観点から古代反切の口唱法を想定してみたのが、2節の（c）声母代入式口唱法[＝双声法]である。つまり、反切から帰字の音を導き出す口唱法は反語作成の前半段階の作業にほかならない。

5. 「反」から「切」へ

唐末以前の反切の形式である「BC反」の「反」が南北朝の時期に流行した「反語」と無関係でないことは、小西氏がすでに指摘している。しかしその具体的な解釈には従うことができない。小西氏によれば、「反語は先づ上一下と取った後、必らずまた下一上と逆にかへすものであって、その「逆にかへす」ことが即ち「反」なのである。（小西 1948；185-186 頁）」という。小西氏はおそらく反切の口唱法として縮合式口唱法を想定していたため、「BC」を縮合式に読み上げて「A」を求めた後、今度は「CB」とひっくり返してから縮合式で「D」を求め、その結果「AD」という反語を得るものと考えたようである。そして「反」はその反語作成において「BC」を「CB」と「逆にかへす」手順に由来するのだとしている。しかし、この想定は、口唱法の問題を除いて考えてもすこぶる理不尽と言わねばならない。仮に小西氏の手順に従った場合、「BC」から反語たる「AD」を求めるのに、「逆にかへす」作業が必要となるのは「D」を求める場合のみである。ところが反切とは「BC」から「A」の発音を求める作業であるから、そこには「逆にかへす」手順は不要である。したがって不要な手順を示す「反」が反切の表示に用いられたとは考えられない。

事実はもっと単純なのであろう。「A BC反」の「反」は「反語作成と同様の作業によって音を求めよ」というほどの意味と思われる。正確には反語作成の前半部分が反切における作業ということになるが、「反」という表示があることによって、作業方法（すなわち口唱法）が明確化されるわけである。

なお、「反語」とは「逆言葉。ひっくり返した語。」の意と考えられる。「灼良」をひっくり返して逆に読むと「章略」になると、当時の人は認識したのであろう。一般に、「逆に読む」ということの意味は言語によって異なる。日本語では音節単位（カナ単位）で認識するため、「しんぶんし」は逆から読んで「しんぶんし」ということになり、英語ではアルファベット単位でこの作業を行うので、「live」の反対が「evil」ということになる。漢語の場合には声母と韻母を交換することによって、言葉が逆さになる感覚を捉えたのであり、『文鏡秘府論』所引「調四声譜」において、「綺琴」と「欽伎」の関係を「互相反也」と表現しているのがまさにそれにあたる。

1 節に述べたように、唐末五代頃を過渡期として、宋代以降は専ら「A BC切」という表示がなされるようになる。この場合の「切」は『増修互註礼部韻略』「切」字注に「音韻展転相協謂之反、亦作翻。兩字相摩以成声韻謂之切。其實一也。」というように、“二つの字をこすり合わせる”意味に理解してよいであろう。宋代以降、反切が縮合式口唱法によって理解されてゆくことと、その表示に「BC切」が用いられることは無関係ではないと私は考える。唐末以前の古代反切は、反語作成との関連を有する「声母代入式口唱法 (=双声法)」によって理解され、それ故にその表示も「BC反」であったが、唐末以降は徐々に縮合式口唱法による反切理解が広まり、表示にもその意を反映する「BC切」が採用されるようになったものと想像する。

<文献>

小西甚一 (1948) 『文鏡秘府論考 (研究篇上)』 (大八洲出版)

平山久雄 (1966) 「敦煌毛詩音残卷反切の研究(上)」 『北海道大学文学部紀要』 14-3

遠藤光暁 (1988) 「敦煌文書 P2012 「守温韻学残卷」 について」 『青山学院大学「論集」』 29

中村雅之 (1992) 「中古音重紐の音韻論的解釈をめぐって」 『富山大学人文学部紀要』 18